

青島健太が語る

応援！
学校の感動印 第 27 回

汗にまみれて 飛ばす札

海城中学校・高等学校
競技かるた部

Kaijo Junior & Senior High School

練習が始まっている校舎2階の教室を訪ねる。部屋二面に畳が敷き詰められ、10組の生徒たち(20人)がそれぞれ百人一首の札を挟んで向かい合っていた。畳に浸み込んだ汗の臭いだろうか、部屋中に懐かしい青春の香り(笑)が立ち込めている。

100枚の札から50枚を空札として抜き、残り50枚を2人で25枚ずつに分ける。その25枚をそれぞれ自分の前に3列に並べる。自分の札が、先に無くなれば勝ちだ。相手の札を取れば、自分の札を一枚渡す。お手付きはペナルティーとして1枚もらうことになる。

腰を上げて戦闘態勢に入る部員たち。静寂と緊張がまるで質量を持っているかのように部屋の中に重く漂う。上の句が読まれる。

春過ぎて……

と、ここまでで勝負は決した。厳密に言えば、「春過ぎて」の「す」の音が聞こえるや否や下の句が払われる。ゆっくりと歌全体を味わっている暇はない。「春」で始まる歌は、百人一首には2つしかない。「春過ぎて」か「春の夜の」である。だから「す」が聞こえた瞬間に、下の句が特定できる。取るべき札は、「衣ほすてふ天の香具山」となるわけだ。

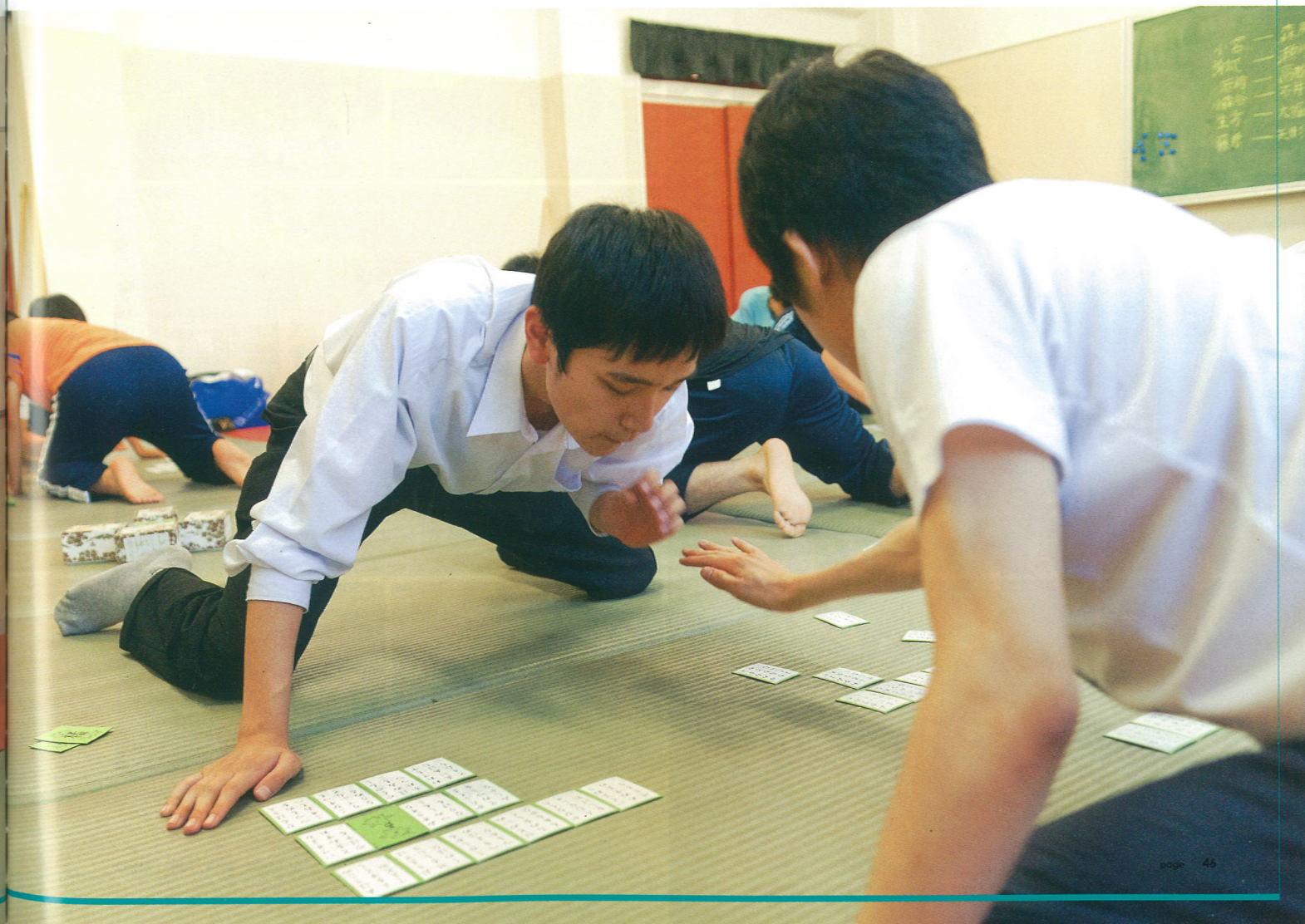
春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふ天の香具山

持統天皇

一見優雅に思われる「百人一首かるた」は、汗の香りたつぶりの反射神経のスポーツだ。そして立ち込める男子校の香りの中で思った。「夏来にけらし」のこの時期に干すべきは白妙の衣ではなく、ツーンとくる薄緑の「畳」ではないか……(笑)。

海城学園(中学校・高等学校)の「競技かるた部」には、40人近い部員が在籍している。個人戦、団体戦、東京都でもつねに上位争いをする強豪校だ。野球部の顧問も務める本間純二先生(国語科)が「競技かるた部」も兼務しているが、2年前から上野愛理先生(国語科)が加わり「競技かるた部」の士気とテクニックはさらに上がった。上野先生は、競技かるたの強豪校、滋賀県膳所高校の「かるた部」で選手として活躍していたからだ。上野先生の話の聞くと競技かるたの奥深さがよく分かる。

「かるたには最初の一字を聞くだけで取れる札が7枚あります。これを『二字決まり』と言います。また『さ行』で始まる札は5枚。これを特に『S音』と言います。このS音は、微妙な子音



高校百人一首



の違いを聞き分けなければいけない。だから、かるたではクーラーの音も邪魔なので練習中はエアコンを切っています」

なるほど、だから練習場が汗臭くなるわけだ(笑)。

海城中学では、もう20年以上授業の一環として3学期に学内でかるた大会が開催されている。かるたを通して古典に出会い、それを体に浸み込ませて五感で戦う。そのおもしろさに魅了された生徒が、さらにそれを極めようと「競技かるた部」に入部してくるのだ。飛び散った札が整えられて、次の歌が読まれる。

瀬……

その瞬間に部員たちが反応する。一字決まり、例のS音の歌である。

瀬を早み岩にせかるる滝川の
わかれても末に逢はむと思ふ

崇徳院

「せ」が読まれた刹那、まるで川の水が岩にぶつかって飛び散るがごとく下の句が払われ周囲の札が一斉に飛ぶ。凄まじいスピードだ。学生時代は野球で活躍した本間先生が言う。

「私自身、競技かるたの専門家ではないので、技術指導はまったくできません。でも競技かるた部は運動部以上に運動部です。かるたは『畳の上の格闘技』だと思っています」

部員たちはどんなイメージで札を取っているのだろうか。

高松諒君(高2)が言う。

「自陣と相手陣、全体を視野に入れておかないと全部の札に反応できない。まっすぐ前を向いているんですが、実際には何も見えていない……という感じがすかね」

森脇優人君(高2)が続ける。

「歌が読まれるまでは目を閉じていて、音を聞いて取りに行くときに目を開けるような感じ。もう札がどこにあるのかは分かってい

るので、読まれた瞬間にそこに動き出している感じですね」

普段からどんなトレーニングをしているのだろうか。

「電車の中で音楽を聴いているときでも、歌詞の始まりの音に気を付けたりしますね」森脇君。

「普段の授業でも、先生が話し出すときの最初の音が、ついつい気になったりしちゃうんです(笑)」高松君。

中学時代、森脇君は野球部、高松君も陸上部にいた。二人ともウェイトトレーニングも欠かさずに続けている。百人一首という古典に関わりながらも、本間先生の言葉通り運動部以上に運動部らしい日常を送っている。運動部と一旦は分かれたように見えて、その流れが再びかるたで合流する。まさに「わかれても末に逢はむ」である。

今でも運動部と兼部しながらかるたを続けているのは瀬川堅心君(高2、テニス部)だ。瀬川君が言う。

「早く取るには、やはりいろいろな力が必要。耳の力、運動神経、左右のバランス、重心を真ん中に置いて構える。テニスにも似ています。家でそんなことを考えながら練習している。なんか無性にやりたくなっちゃうんですよ。部活を越えて、もう完全に趣味の世界です(笑)」

大堀晃尚君(高2)はかるたを始め



けました」

そこで私は教えてあげた。「先輩たちは、札を見ないで取るらしいよ」

「やべー、そうなんですか。もっと研究していかなくちゃダメですね」

そんな中学生部員の話聞きながら高3の実力者小泉光広君が言った。

「ボクらのころは、まだ中学に競技かるた部がなかった(2年前に創部)。彼らみたいに中学から本格的にやったら部はもっと強くなりますね。かるたをやっ

て良かったこと？ 内的な変化で言えば、古典が嫌いにならずに済んだってことですかね(笑)」

教室では、練習が続く。次の歌が読まれる。

田子の浦にうち出でて見れば……

おっと、空札だ。前のめりになっていた部員たちから、思わず「ふー」と息が漏れる。

海城学園の創立は、1891年(明治24年)の海軍予備校まで遡る。明治33年、海城学校とその名を改称し現在に至る男子校の名門だ。民主主義を守るフエアな精神を校是としてきた伝統校は、近年「新しい紳士」の育成を目指している。思いやりの心を持ち、明確に意思を伝えることのできる若者の養成。時代が求める新しい学力、新しい人間力を身に付ける。そのために大切なことは、対話的なコミュニケーション能力とさまざまな問題を解決する能力の

習得。その意味では百人一首かるたも、海城らしい古くて新しい取り組みと言えるのだから。

田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ

山部赤人

富士の絶景を詠む有名な一句は、「うち出でて見れば」という行動から生まれている。「あえて出て見てみれば」という積極性と好奇心があればこそ感じることができる富士の高嶺だ。「競技かるた部」の部員たちは、百人一首という古典を通じて、過去と今をつなぐ。そしてその行動と体験を未来に活かす。海城の新しい紳士たちは、知的に百人一首に挑み、若者らしくフィジカルに戦っている。

そして今日も札は飛びつつ……

青島健太

スポーツライター・キャスター

1958年4月7日、新潟県新潟市生まれ。春日部高一慶応大一東芝に進み、1985年、ヤクルトスワローズに入団。5年間のプロ野球生活引退後のオフ、半年間の研修の後オーストラリアへ日本語教師として渡り、厳しいプロ野球生活で忘れかけていたスポーツをする喜びや楽しみ方を思い出し、その素晴らしさを伝え手となることを決意し帰国。スポーツライターとして新しい道を歩き始める。現在はあらゆるメディアを通してスポーツの醍醐味を伝えている。慶應体育大学、流通経済大学、日本医療科学大学客員教授。

